

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 5 日現在

機関番号：35405

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26760007

研究課題名(和文) 南部アフリカ・カリバ湖の漁業資源をめぐる社会の動態

研究課題名(英文) Social Dynamics over Commercial Fishing Industry in Lake Kariba, Southern Africa

研究代表者

伊藤 千尋 (Ito, Chihiro)

広島女学院大学・国際教養学部・講師

研究者番号：00609662

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、南部アフリカ・カリバ湖の商業漁業(カペンタ漁)をめぐる社会の動態を明らかに、持続可能な資源管理の枠組みについて検討することを目的とした。研究の結果、カリバ湖では商業漁業をめぐるアクターの多様化、集団性の弱体化が起こり、違法な漁が増加していた。そのため、漁業に関わる事業者を一面的に捉えるのではなく、その多様性や目的の差異、湖を共有するザンビアとジンバブウェにおける制度や実践の歴史の変遷等をふまえて、持続的な資源管理の枠組みについて議論していく必要があることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：This research project aims to identify the social dynamics over commercial fisheries, kapenta, in Lake Kariba, Southern Africa. As a result of the research, it was found that the operators dealing with kapenta fisheries were diversified and their coherence became weak, then the illegal fishing practices were increased. Therefore, it is important to consider these diversity and differences between two countries, Zambia and Zimbabwe, in order to discuss the sustainable resource use.

研究分野：アフリカ地域研究

キーワード：アフリカ カリバ湖 資源管理 商業漁業 ポリティカルエコロジー

1. 研究開始当初の背景

これまで「暗黒大陸」と称されてきたアフリカは、近年めざましい経済成長を遂げ、「最後のフロンティア」として世界から注目を集めている。しかし経済活動が活発化するにつれて、資源が過剰に利用されるようになり、環境に関わる問題が深刻化している。さらに温暖化などのグローバルな環境変動もあいまって、資源の不安定化が起こっている。

自然資源に依存して暮らす人びとが多いアフリカでは、資源の減少は生活に直結する深刻な問題である。そのため、持続的な資源利用と管理の枠組みを構築することが喫緊の課題であり、日本をはじめとした先進諸国も積極的に貢献していくことが求められている。

本研究が対象とするカリバ湖は、ザンビア・ジンバブウェの二国間にまたがる人造湖である。カリバ湖では、カペンタ(*Limnothrissa miodon*: 図1)と呼ばれる小魚を獲る商業漁業が地域住民の生計を支えてきた。しかし近年、生態学的な研究成果から、温暖化による湖の気温上昇や栄養分の変化を背景として、カペンタの漁獲量が減少していることが明らかにされてきた。このような研究では、自然科学的な結果をもとに、漁獲量の適切な管理の必要性を唱えている。

しかしながら、これらの議論は湖を利用する人間活動や社会の動態とは切り離されて行われている点で問題である。

報告者は、2006年から長期フィールドワークを基盤としてカリバ湖沿岸の中小都市の都市化プロセスと、農村部への影響に関する研究を行ってきた。これまでの研究から、カペンタ漁は都市居住者に雇用をもたらすだけでなく、周辺農村部の人にとっても収入源として重要であることを明らかにした。さらに近年の特徴として、カペンタ産業に参入するアクターが多様化している実態を把握した。すなわちカペンタ産業には、都市住民、国内外から参入する起業家、地方・中央政府など、様々なアクターが関わっており、利害関係は多層的で政治的である。

そのため、上記のような生態環境の観点のみから利用と管理の枠組みをトップダウン



図1 カペンタ

的に構築しても、利用する側の論理を反映しておらず、現実には適用しがたいと考えられる。現実的な資源利用と管理の枠組みを構築するためには、カペンタ産業をめぐる社会の動態を解き明かし、これまでの自然科学的な成果とすり合

わせていく必要があると考える。

2. 研究の目的

そこで本研究では、南部アフリカに位置するカリバ湖沿岸の主要な漁業資源であるカペンタを対象として、カペンタ産業をめぐる社会の動態を明らかにし、持続的な利用・管理の枠組みを構築することを目的とした。

これまでカペンタ産業については、生態学的な視点から管理の枠組みが議論されてきたが、利用する側の論理やその実態を詳細に明らかにした研究はほとんど見られなかった。本研究は、カペンタ産業に関わる様々なアクターや、アクター間の関係を解明し、社会の動態を加味した持続的な利用・管理の枠組みを構築することを目指す。

3. 研究の方法

本研究では、これまでに調査経験があるシアボンガ(ザンビア)とカリバ(ジンバブウェ)の二都市において現地調査を実施した。双方ともにカリバ湖の東縁に位置し、両国におけるカペンタ産業の中心的な都市である。

シアボンガとカリバにおいて、カペンタ漁の現状と諸アクターの特徴、カペンタ漁をめぐるアクターの集団性とそれらの関係性、両国の政治・経済構造がもたらす影響とその相違点、に関する調査を行った。研究期間中、現地調査を実施し、事業者や造船業者、関連する諸機関への聞き取りや資料収集を行なった。

これらの結果を基に、資源の過剰な利用や、利用の抑制・均衡状態を引き起こす社会的なメカニズムについて総合的に考察し、持続的な資源利用・管理の枠組みを検討した。

4. 研究成果

(1) カペンタ漁の現状と諸アクターの特徴
現地調査の結果、カペンタ産業はその事業者の特徴から3つの時期(1970年代初頭から1980年代半ば、1980年代半ばから2000年、2000年以降)に区分された。

カペンタはタンガニイカ湖の在来種であり、1960年代にカリバ湖に導入された。黎明期にあたる第一期では、主にジンバブウェにおいて、タンガニイカ湖で同種の漁を行っていた南アフリカ企業や、国内外の「白人」(注1)起業家らがこのビジネスに参入した。

一方のザンビアでは、カペンタ漁が始まったのは1980年代半ば以降であった。これは、当時ローデシア植民地政府の一方的独立宣言により、現地ナショナリストとの独立戦争がジンバブウェにおいて勃発していたためであった。カリバ湖は国境線に位置しており、ローデシア政府軍の攻撃によって、沿岸部での漁業は停止していた。

第二期は、ジンバブウェにおいて黒人層の参入が開始する時期であり、ザンビアにおいては漁が開始される時期にあたる。ジンバブ

ウェでは、1980年の独立後、政府の支援を受けた黒人事業者が、協同組合という形で参入し始めた。ザンビアでは1980年代半ばに、ザンビア内外の「白人」起業家が中心となって、カペンタ漁を開始した。

第3期の2000年以降は、両国において「黒人」層の新規参入が増加した時期にあたる。

ジンバブウェでは、土地改革と並行して、漁業ライセンスの再分配が実施された。この再分配では、「白人」事業者が所有する漁船数を減らし、その分を「黒人」事業者へと分配した。再分配の結果、退役軍人、与党関係団体、一部の協同組合と個人起業家などに新たなパーミットが与えられた。また、再分配にともない、パーミット所有者が他者にパーミットを貸し出すことを許可する新たな制度が設けられた。パーミットの貸し借りが可能になったことは、従来よりも商業漁業への参入を容易にした。その結果、利害関係の異なる多様なアクターが乱立するようになった。

ザンビアでは、1990年代後半以降の経済自由化や、2000年代後半以降の経済成長により、大都市に暮らす起業家や、農村住民、シアボンガ在住の退職者等による参入が増加した。

新規参入者の増加により、両国ともにアクターの出自やビジネス参入への目的が多様化し、零細事業体が増加するという結果がみられた。

(2) カペンタ漁をめぐるアクターの集団性とそれらの関係性

上述したアクターの変化にともない、アクター間関係も変化してきた。両国に共通してみられた主な特徴は、アクターが多様化したことによる生産者組合の弱体化であった。以下ではジンバブウェを事例に結果を簡単に述べる。

ジンバブウェでは、第1期に「白人」事業者らが生産者組合を結成した。この組合では、組合費を徴収し、首都に事務局を配置していた。また、組合単位での大口取引や部品の共同購入などを行っており、実質的にまとまりを持った集団として機能していたことがわかった。

一方、入植型植民地支配が長く続き、独立戦争を経たジンバブウェでは、第二期に参入した初期「黒人」事業者層は、既存の生産者組合に入ることを拒否し、独自の生産者組合を組織した。このことにより、「白人-黒人」という対立的な構図が現れた。

第三期には、新規参入者の増加により、組合の機能が弱体化していた。新規参入者のなかには、「白人」「黒人」のどちらの生産者組合にも属していないという事業者が多くみられた。

このような状況下において、新規事業者たちの間には、インフォーマルな雇用関係が創出されていた。また、アクターの多様化にと

もない、既存組織は弱体化したが、事業者らは「白人-黒人」という枠にとらわれない個別の協働関係を構築していることが明らかになった。[結果(1)を含め、現在、投稿論文を準備中]

(3) 両国の政治・経済構造がもたらす影響とその相違点

ザンビアとジンバブウェは、ともに旧イギリス植民地であり、隣国マラウイを含めローデシア・ニヤサランド連邦を形成していた時期もある。また、トンガやショナといった双方にまたがって居住している民族がいるなど、両国は文化的特徴にも類似する点が多い。

しかしながら、ジンバブウェが白人入植の長い歴史や独立の過程における戦争などを経験しているのに対し、ザンビアは東・西アフリカと同時期の1960年代に平和裏に独立を達成し、その後も比較的政情が安定しているという構造的な違いが存在する。特にジンバブウェでは、2000年の土地改革以降、ハイパーインフレーションが発生し、自国の通貨利用を停止するといった経済危機に陥った。その一方で、現在では、グローバル化の急速な進行によって南アフリカ企業の経済進出や中国による援助の流入などの同時代性が見受けられる。

このような状況のなかで、両国の商業漁業をめぐる実践には、様々な差異や共通点が見出された。

例えば、制度の違いである。ジンバブウェでは、白人入植の歴史が長く、商業漁業は野生動物保護庁や、国の研究機関によって詳細に研究され、管理されてきた歴史を持つ。2000年代以降は、国内の混乱によりこの体制は弱体化しつつあるが、漁業ライセンスの管理や違法行為に対する罰金制度など、制度的側面は色濃く残っている。一方のザンビアでは、ジンバブウェのような厳密な制度や体制が見られず、両国で取り決められた漁業ライセンス数よりも多く発行されているといった状況も発生していた。

(4) 持続的な資源利用の枠組みに向けて

現地調査の結果、カリバ湖における商業漁業の変遷や、両国における現状と課題が明らかになった。現在、カリバ湖では違法な漁が増加し、漁獲量が現象しているという報告が相次いでいる。カペンタは、カリバ湖における貴重な商業漁業の資源であり、関連産業をふくめて地域内外の多くの雇用を支えている。また、塩干魚として広く農村部にも流通していることから、地域住民のタンパク質源としても重要な役割を持っている。

現在でも、ザンビア・ジンバブウェ間では、資源利用や規制に関して議論をする場は存在する。しかし、それらは本研究が明らかにしたような商業漁業に関わる多様な主体を

包摂するものとはなっておらず、実質的な機能には疑問が持たれる。

そのため、持続的な利用を模索していくためには、上述したようなカペンタ漁をめぐる社会の動態および両国の制度・実践にみられる差異に留意しながら、定期的に両者の関連機関や諸アクターが話し合うことができるプラットフォームが必要となると考えられる。そのためには、研究者、関連諸機関、漁業に関わる事業者らとの連携がこれまで以上に求められる。

注 1：イギリスの入植型植民地支配が進み、人種差別的な政策が実施されてきた南部アフリカ諸国では、現在でも「白人」「黒人」という区分が政治的・経済的・文化的な差異をもたらししている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

ITO, C. in press. Development Process of Fishing practices within Commercial Fisheries in Lake Kariba, Southern Africa. *Revue d'ethnoécologie*. (査読有)

伊藤千尋. 2015. 「フィールドにおける「ノート」の多機能性」『地理』9月号: 42-46. (査読無)

伊藤千尋. 2014. 「ジンバブウェの混沌と希望」『地理』11月号: 36-44. (査読無)

〔学会発表〕(計5件)

伊藤千尋. 2017. 「カリバ湖の商業漁業(カペンタ漁)における漁法の成立とその背景」日本アフリカ学会第54回学術大会, 長野(信州大学), 2017年5月20-21日.
伊藤千尋. 2016. 「南部アフリカ・カリバ湖の商業漁業における漁法の成立とその背景」2016年日本地理学会春季学術大会, 東京(早稲田大学), 2016年3月20-23日.

伊藤千尋. 2015. 「ジンバブウェの商業漁業における「現地化」植民地化の経験とインフォーマルな実践の混淆」2015年日本地理学会春季学術大会, 東京(日本大学), 2015年3月28-30日.

伊藤千尋. 2014. 「ジンバブウェ・カリバ湖における漁業パーミットの再分配とその影響」日本アフリカ学会第51回学術大会, 京都(京都大学), 2014年5月23-25日.

伊藤千尋. 2014. 「ジンバブウェ・カリバ湖の漁業資源をめぐる社会の動態」2014年日本地理学会春季学術大会, 東京(国士舘大学), 2014年3月27-30日.

〔図書〕(計1件)

伊藤千尋. 2015. 『都市と農村を架ける--ザンビア農村社会の変容と人びとの流動性』新泉社. 304頁.

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

<http://bit.ly/144PgEa>

受賞

伊藤千尋. 2016年度日本地理学会賞(優秀著作部門). 受賞作: 『都市と農村を架ける ザンビア農村社会の変容と人びとの流動性』(新泉社, 2015年)

伊藤千尋. 第29回(2017年度)日本アフリカ学会研究奨励賞. 受賞対象業績: 『都市と農村を架ける ザンビア農村社会の変容と人びとの流動性』(新泉社, 2015年)

6. 研究組織

(1)研究代表者

伊藤 千尋 (ITO, Chihiro)

広島女学院大学・国際教養学部・国際教養学科・専任講師

研究者番号: 00609662

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

なし